



ミュウミュウ ショートフィルムプロジェクト
「MIU MIU WOMEN'S TALES (女性たちの物語)」

2011 年のスタート以来、Miu Miu Women's Tales は、現代を代表する女性映画監督たちとのコラボレーションを通じて、女性たちの多様な視点や想像力を映し出してきた短編映画シリーズです。16 年にわたり 32 作品を発表し、女性監督による短編映画プロジェクトとして継続的に展開されてきました。

本シリーズでは、世界各地の映画作家たちに創作の自由を委ねながら、21 世紀における女性性や自己表現を独自の視点で描くことを促しています。それぞれの作品は、美しく個性的な世界観のなかで、女性たちの物語や感性を鮮やかに映し出します。

また、ミュウミュウのコレクションは単なる衣装としてではなく、物語を構成する重要な要素として作品の中に織り込まれています。著名な俳優やモデルとともに、ファッションそのものがひとつのキャラクターとして存在感を放ち、物語を彩ります。

Miu Miu Women's Tales は、ミウッチャ・プラダが長年にわたり探求してきた女性性への考察を映画という表現へと広げる試みでもあります。真摯でありながら遊び心に満ちた視点で、変化し続ける女性像を描き続けています。本シリーズは、現代の女性たちに向けた新たなイメージやロールモデルを提示するとともに、世代を超えた映画ファンのコミュニティを育み、ポストシネマ時代における映画体験の新たな可能性を切り拓いています。ミウッチャ・プラダは次のように語ります。「Women's Tales を通じて、私たちは女性について女性と対話する場を創り上げてきました。」

過去の作品は、ヴェネツィア・デイズのプログラムやニューヨークコレクションで上映されています。クレール・ドゥニ監督による最新作第 32 弾『Avec Kim』は、2026 年 9 月 5 日ヴェネツィア国際映画祭ヴェニス・デイズ (Giornate Degli Autori) 部門にてモナ・ファストヴォルド監督による第 31 作『Discipline』とともに上映されました。初公開されました。これまでに発表された作品はいずれも、独占インタビュー、撮影風景とともに、ミュウミュウのデジタルチャンネルで公開され、その後オンライン動画配信サービス MUBI にて世界配信される予定です。

「MIU MIU WOMEN'S TALES (女性たちの物語)」

作品情報

	作品名	監督	公開
第1弾	『The Powder Room』	Zoe Cassavetes	2011年 1月
第2弾	『MUTA』	Lucrecia Martel	2011年 7月
第3弾	『The Woman Dress』	Giada Colagrande	2012年 2月
第4弾	『It's Getting Late』	Massy Tadjedin	2012年 8月
第5弾	『The Door』	Ava Duvernay	2013年 2月
第6弾	『ヴッチリアの女性たち』	Hiam Abbass	2013年 8月
第7弾	『Spark and Light』	So Yong Kim	2014年 2月
第8弾	『SOMEBODY』	Miranda July	2014年 8月
第9弾	『DE DJESS』	Alice Rohrwacher	2015年 2月
第10弾	『LES 3 BOUTONS』	Agnès Varda	2015年 9月
第11弾	『SEED』	Naomi Kawase	2016年 2月
第12弾	『THAT ONE DAY』	Crystal Moselle	2016年 9月
第13弾	『Carmen』	Chloë Sevigny	2017年 2月
第14弾	『(THE [END] OF HISTORY ILLUSION)』	Celia Rowson-Hall	2017年 8月
第15弾	『HELLO APARTMENT』	Dakota Fanning	2018年 2月
第16弾	『THE WEDDING SINGER'S DAUGHTER』	Haifaa Al-Mansour	2018年 9月
第17弾	『SHAKO MAKU』	Hailey Gates	2019年 1月
第18弾	『BRIGITTE』	Lynne Ramsay	2019年 9月
第19弾	『NIGHTWALK』	Małgorzata Szumowska	2020年 2月
第20弾	『IN MY ROOM』	Mati Diop	2020年 9月
第21弾	『SHANGRI-LA』	Isabel Sandoval	2021年 2月
第22弾	『I AND THE STUPID BOY』	Kaouther Ben Hania	2021年 9月
第23弾	『HOUSE COMES WITH A BIRD』	Janicza Bravo	2022年 3月
第24弾	『CARTA A MI MADRE PARA MI HIJO』	Carla Simón	2022年 9月
第25弾	『EYE TWO TIMES MOUTH』	Lila Avilés	2023年 2月
第26弾	『STANE』	Antoneta Alamat Kusijanović	2023年 9月
第27弾	『I AM THE BEAUTY OF YOUR BEAUTY, I AM THE FEAR OF YOUR FEAR』	Chui Mui Tan	2024年 3月
第28弾	『EL AFFAIRE MIU MIU』	Laura Citarella	2024年 8月
第29弾	『Autobiografia di una Borsetta』	Joanna Hogg	2025年 2月
第30弾	『FRAGMENTS FOR VENUS』	Alice Diop	2025年 8月
第31弾	『DISCIPLINE』	Mona Fastvol	2026年 2月
第32弾	『Avec Kim』	Claire Denis	2026年 9月



第 32 弾 『Avec Kim』

■ あらすじ

窓のない自動車修理工場。明るい白色の蛍光灯に照らされたその空間で、巨大な 1980 年代製セダンの下から若い女性が姿を現します。整備士用のつなぎと顔は油污れにまみれています。長い一日の仕事を終え、自動車という“時間のカプセル”を修理した彼女は、流し場で勢いよく身体を洗います。それにもまた時間がかかります。

外へ出ると昼の光。ガレージの扉が開き、生まれ変わった車が慎重にパリの通りへと走り出します。運転手は都市のサイレンのような存在です。全身をダークレザーで包み、髪型やサングラスは、私たちの時代よりも前の別の時代を思わせます。

音楽に導かれながら、運転手の視点で昼下がりのパリの街を進みます。言葉を交わすことなく進む彼女の道中では、詩的な出会いや小さな謎が次々と現れながら、やがて彼女は「キム」に出会います。

フランスを代表する映画監督・脚本家クレール・ドゥニが監督した『Avec Kim』は、Miu Miu Women's Tales シリーズの第 32 作目です。高い評価を受けるこの短編映画シリーズは、現代を代表する独創的で深い視点を持つ女性監督たちを招き、21 世紀における女性性と自己を演出する欲望について探求する場を提供しています。

50 年以上にわたり、クレール・ドゥニの作品は「身体映画」と称されてきました。西アフリカから現代フランスまで、植民地主義やポスト植民地主義をテーマに描き続けてきた彼女の作品の中でも、『美しき仕事(Beau Travail)』(1999 年)は史上最高の映画のひとつと評価されています。

本作『Avec Kim』は、「映画で身体を捉えることだけが私の関心事」と語るドゥニの映画づくりの本質が凝縮されている作品です。視覚や音、身体そのものの存在感といった感覚的な体験を重視し、明確な物語や台詞よりも感覚を優先する映画表現が特徴です。

『Avec Kim』は、女性の強さの源泉、女性同士の友情が持つ遊び心に満ちた力、そして衣服が人格を作り変える力など、女性像に関する典型的な表現を称賛しながらもそれらに新たな問いを投げかけています。

俳優たちに大きな自由を与え、アドリブや即興的な演技を重視することで知られるドゥニは、「カメラは俳優たちに寄り添い、敬意を払うことで、私にとって最も重要な振付師となる」と語っています。主人公を演じるのはスザンヌ・ランドン。著名俳優ヴァンサン・ランドンとサンドリーヌ・キベルランを両親に持ち、芸術的な環境の中でパリに育ちました。19 歳で脚本・監督・主演を務めた映画『Spring Blossom』(2020 年)で俳優デビューを果たしています。

一方、「キム」を演じるのは、伝説的アートロックバンド Sonic Youth の共同創設者であり、ヴィジュアルアーティスト、作家、そしてファッション・カルチャー界のミューズとして複数世代に影響を与え続けるキム・ゴードンです。ゴードンは本作の音楽も手掛けており、官能的で広がりのあるサウンドによって都市に息づく無数の人間模様を描き出しています。

ドゥニ特有の、意図された身振りや他者への寛容さへの躍動的なまなざしは、本作においても顕著です。彼女は自身の映画表現を「人間がどれほど残酷であったとしても、人間への優しさと愛によって作られている」と表現しています。

『Avec Kim』は、パリを舞台にした小さな出来事によって紡がれるロードムービーです。女性たちの身体、その身体によって演じられる人物像、そしてその周囲に広がる感情の大きな世界を描いて



います。



クレール・ドゥニ / 監督・脚本家

パリ生まれのクレール・ドニは、幼少期を複数のアフリカ諸国、特にカメルーンで過ごした。12歳でフランスに戻り、映画を愛する教師との出会いをきっかけに作家主義的な映画(auteur cinema)に目覚める。1972年、IDHEC(フランス高等映画学院)を卒業。その後、助監督としてキャリアをスタートさせ、ロベール・アンリコ監督の『追想』(1975年)や『L'Empreinte des géants』(1980年)、ヴィム・ヴェンダース監督の『パリ、テキサス』(1984年)や『ベルリン・天使の詩』(1987年)などに携わった。この時期、当時ヴェンダースの撮影助手だったアニエス・ゴダールと出会い、後に彼女はドニ作品の撮影監督を務めることになる。その後、ジム・ジャームッシュ監督の『ダウン・バイ・ロー』(1986年)にも参加。1988年には、1950年代の植民地アフリカを舞台とした半自伝的作品『ショコラ』で長編映画監督としてデビュー。同作はカンヌ国際映画祭コンペティション部門に選出され、セザール賞にもノミネートされるなど、アメリカの批評家からも高い評価を受けた。1994年には『パリ、18区、夜。』がカンヌ国際映画祭「ある視点」部門に選出。1996年には『ネットとボニ』でロカルノ国際映画祭の金豹賞を受賞した。その後、『美しき仕事』(1999年)、『ガーゴイル』(2001年)、『金曜の夜』(2002年)、『35杯のラムショット』(2008年)、『ホワイト・マテリアル』(2009年)、『バスターズー悪い奴ほどよく眠るー』(2013年)、『レット・ザ・サンシャイン・イン』(2017年)、『ハイ・ライフ -HIGHT LIFE-』(2018年)などを発表。2022年には『愛と激しさをもって』でベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞。同年、『Stars at Noon』でカンヌ国際映画祭グランプリを受賞した。最新長編作品『The Fence』は2025年に公開された。

■ 『AVEC KIM』

シーズン: 2026年春夏/秋冬コレクション
公開: 2026年9月5日
監督/脚本: クレール・ドゥニ